



いとみななければならない。

玉の井親方がいつ亡くなったかは、はっきりしないが年寄名簿からみて、明治十年代に次の玉の井が年寄役にでていることから、十年代に没したものとみられるが、津軽古今偉業記では明治三十四年に玉の井と懇話したとあるが実につじつまが合わない。このことはあとでもう一度考えることにしたいが、玉の井の年齢について、一人玉の井だけではなく江戸時代から明治初年までは戸籍簿がしっかりしてないですが、六ッヶ峯駒吉という大男の力士は六十歳まで、三役を五場所、幕内を十三年間つとめたという。また数え年六十歳まで土俵をつとめた八十島嘉六は彼の年齢ははっきりしているという。ほかにも老齢力士はまだまだ伝えられているが昔ほど多くなっている。

昔ほど息がながい四、五十年代

江戸時代の力士は、いまの土俵年齢から考えるとあきれれる息が長いにはおどろかざるをえない。三十歳より四十歳に入ってから引退する力士が多いようで、たとえば歴代横綱の引退年齢をあげると、谷風（四十六）・小野川（四十）・阿武の松（四十五）・稲妻（四十六）・不知火諾（四十四）・秀の山（四十六）・雲竜（四十三）・不知火光（四十六）・陳幕（四十一）で横綱級でこの年齢で引退しているのだから他の関取はもっと長く現役をつとめたであろう。

また偉業記の書かれた年月から推察しても時間があまりにも離れている。

明治三年に玉の井が引退され、木村家の戸籍をみれば木村与市が同三年一月に家督相続をなされていることは、明治二年には父久四郎が他界し十二歳で一家の主になったことは、遅生れであったことを示している。私は久四郎は玉の井の兄でくしくも兄の死んだ年が玉の井の現役引退と時を同じくし、のち明治五年以降に墓石を建立したものとみる。兄の死と祖先供養のため、現役を去っても年寄役という職があり資金の余裕があった時、生れ故郷に送金して墓石を建てたのではないかと推考する。ただ始めに建立した土地が沖飯詰であるか中柏木であるかは、推察の域をでないが沖飯詰の生れ故郷であることが順当な気がする。

もしも中柏木に移住してから建立したとすれば明治二十三年以降になるが、墓石に刻みこまれた年代がもっと遅れて現れていなければならないし、そこには必ず木村家の紋章があるはずだがそれが見当らない。また部落の年輩のかたがたに木村家の墓石建立の由来を尋ねてもだれもいきさつは聞いたことがないという。明治二十三年以後といえば部落の戸数は二十戸たらずの成田氏は六戸しかない。その六戸のなかに木村家は姻戚の関係で含まれている。

木村与市氏が中柏木に移住してから萬十郎屋敷といわれる妻にゆかりのある成田氏系の墓地に移転したとしか考えられない。

これが明治時代になると、三十代が六人、四十代が四人になり、大正に下がると大阪横綱の大錦大五郎をのぞいてはみんな三十代でやめている。ということは時代がさかのぼるほど老齢力士が多いということ、理由としては、当時の相撲はゆったりとした四つ相撲であるから、体力と得意技の体型さえあれば持久力を保つことができたといわれているが、それほどばかりではない何か相撲社会にあったのだろう。

いままでのべたように玉の井村右衛門だけが相撲史のなかで突出した老齢力士というだけではないが、日本の相撲歴史における最長の老齢力士として奮励したことは、ねばり強い津軽人の、また風雪にもまれた西北地方の出身でなければなし遂げ得ない、見本であったといっても差支えない。

そこで再び木村家の墓碑名から玉の井との繋りの結びつきをひもとくとき解明できない要素の割合が非常に多いが、順を追ってひとつひとつ考えていきたい。

「津軽古今偉業記」からは明治九年五十九歳にて年寄役となり同三十四年に懇話したとあるが、その時すでに八十四歳の齢であり何か釈然としないものを感じる。また相撲の番付からみての明治三十四年には九十四歳になっているので信じるほうがちょっとおかしくなる。

力士のうちでも人並以上に努力し、体力を消費し、精神的にも、肉体的にもすべてを駆使して相撲に生きた玉の井が、当時の平均寿命からしてあまりにも長生きしたことになる。

小さな部落で墓石を建てるとなれば、当然部落の話題になるし、語り継がれて不思議はないのに、誰一人として建立の経緯を聞き及んでいないことは、移転というひそかな行事なるがゆえに人々の脳裏に気憶として残らないのではないかと推測するが、墓石を建てることは家を建築するのと同じで一世一代の事業でそうやすやすと建てられるものではなかったという。

老雄力士玉の井村右衛門は五所川原市沖飯詰出身で、ゆかりの中柏木に墓石をきざみ、その名を後世に残していることは中央の相撲史家はだれも知らない。

参考資料 Ⅱ 金木郷土史、五所川原市史、青森市史
青森町内盛衰記、新撰陸奥国誌、土俵今昔
青森県叢書

御寄稿願います

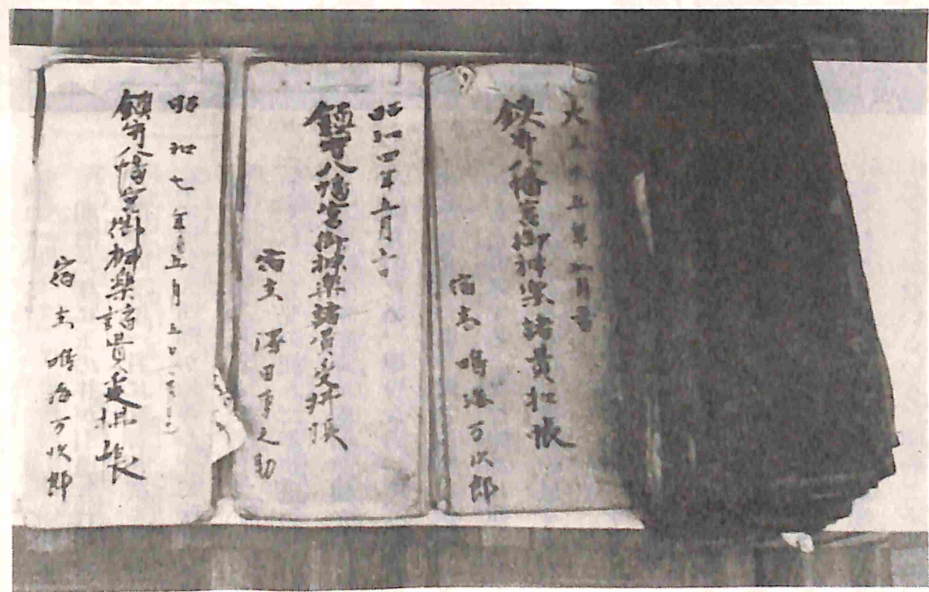
本誌第4集を御愛読載いた方々に御願います。私達の住む津軽は、久慈平九郎為信が東日流を統一した藩政以前の、遠い古代から中世期にわたって津軽の歴史は、中央政権から、まつろわぬ夷民として侵略され続けてきた空白の歴史であったが、古代から津軽にも氏族の民が生活を営み、そこには文化と歴史があったはず。津軽の風習風俗文化と、その歴史伝承について、あなたなりの新釈でもって、御寄稿願えれば幸いです。

＝送付先

＝
かたりべ編集部

奉加帳嘉瀬今昔

きのした清一



写真各御神楽諸色品帳

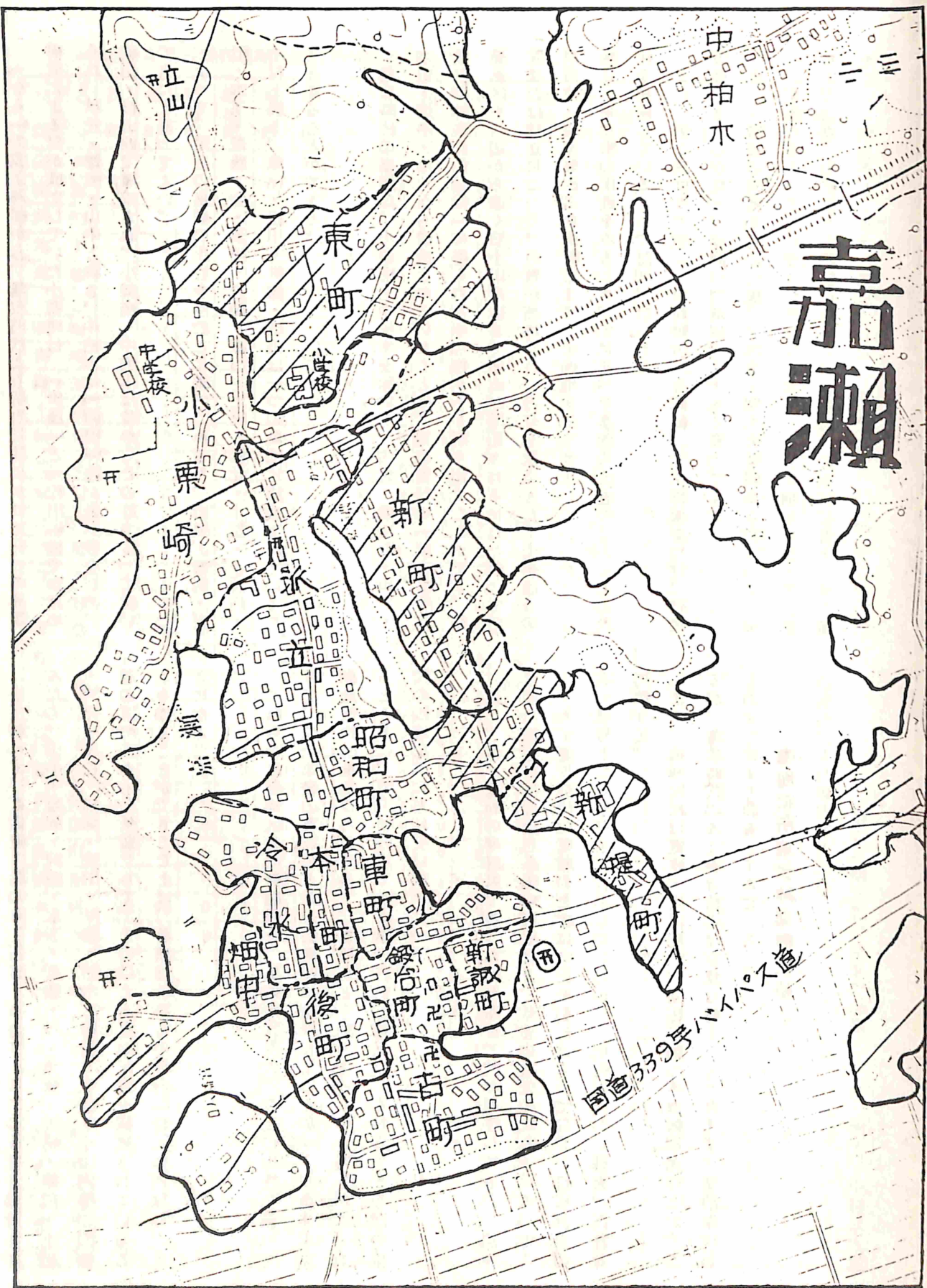
金木町嘉瀬は、役場の所在する金木町の本町より水田をへだてた南に位置する純農村を形成していて、あまり変化にとほしく変らない地区であるが、わたしなりに『むら』の変遷を地区内の氏姓からさぐってみた。嘉瀬地区内の現在の氏姓について金木町住居配置図をもとに町内別にひろってみると別表のとおり区分けされた。

嘉瀬発祥の地、嘉瀬の基点でもあった古町の氏姓の主なもの、代々嘉瀬の庄屋を勤めた素封家であった鳴海善右エ門系の『鳴海』の氏姓がだんぜん多く、平川・内海・木村・木下・山中でもって構成され、沢田・吉崎・秋元・小山内と続いて、後町は『山中姓』を基盤にして、沢田・小松・小山内と続く。

新誠町はもともと鍛冶町から分町したことから、これを鍛冶町にまともて氏姓を調べてみると、山中姓がだんぜんトップで、『沢田』『木下』『須崎』姓で主に構成されている。

東町と本町は『山中』と『鳴海』姓にまともっていて、冷水はほとんど『山中』姓と言ってよく、沢田・今・土岐と続いていて、畑中は、山中・鳴海・斉藤・須崎・土岐が主である。

× × × × ×



昭和59年4月現在嘉瀬地区町内別氏姓区分表

町名 氏姓	古 町	後 町	新 誠 町	鍛 冶 町	車 町	本 町	畑 中	冷 水	派 立	昭 和 町	小 計	昭 和 町	新 町	新 堤 町	東 町	小 計	計	小 栗 崎	中 柏 木	合 計
山中	4	9	4	7	7	4	5	11	5	7	63	4	10	6	2	22	85	6	0	91
鳴海	17	1	2	1	6	5	4	0	6	3	45	2	5	1	2	10	55	2	0	57
沢田	3	4	0	8	0	0	1	4	3	2	25	3	6	0	7	16	41	1	0	42
木下	4	0	1	7	1	1	0	0	3	0	17	0	4	5	3	12	29	0	0	29
斉藤	2	2	1	3	0	1	6	1	2	1	19	1	2	1	2	6	25	1	0	26
今	0	0	2	0	1	1	2	4	6	4	20	1	5	1	1	8	28	0	0	28
須崎	1	2	3	2	1	0	4	0	0	1	14	0	8	0	0	8	22	1	0	23
吉崎	3	0	1	3	0	1	0	1	4	1	14	2	1	2	0	5	19	1	1	21
鎌田	2	0	1	0	0	0	1	0	3	1	8	1	4	1	3	9	17	4	0	21
土岐	1	1	0	1	1	0	4	3	1	0	12	1	2	0	2	5	17	1	0	18
秋元	3	0	4	0	0	0	2	0	0	0	9	1	2	1	3	7	16	8	0	24
小松	1	4	1	2	0	0	0	0	1	1	10	1	2	0	3	6	16	3	0	19
原田	2	0	2	2	0	3	0	0	3	0	12	0	0	3	0	3	15	1	30	46
小山内	3	3	0	0	0	1	0	1	0	1	9	0	1	1	2	4	13	0	2	15
阿部	1	1	0	0	2	0	0	2	1	0	7	1	2	3	0	6	13	0	0	13
木村	4	1	1	2	0	0	0	0	1	0	9	0	1	2	0	3	12	0	1	13
工藤	1	0	0	1	0	0	0	0	2	4	8	1	2	0	1	4	12	2	0	14
神島	0	0	0	0	1	1	3	1	2	0	8	1	0	1	0	2	10	1	0	10
松川	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4	0	2	0	5	7	11	24	0	35
内海	4	0	0	0	0	1	1	0	3	1	10	0	0	0	0	0	10	0	0	10
平川	5	1	2	0	0	0	0	0	0	1	9	0	0	0	0	9	9	0	0	9
花田	1	0	0	0	0	1	0	1	4	1	8	0	1	0	0	1	9	0	0	9
櫛引	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3	5	1	2	1	0	4	9	0	0	9
伊藤	0	0	2	0	0	0	0	0	3	0	3	0	2	0	4	6	9	31	0	40
津田	1	1	0	2	0	0	0	2	0	1	7	0	0	0	1	1	8	0	0	8
黒川	2	0	3	0	1	0	1	0	0	0	7	0	0	1	0	1	8	0	1	9
浜田	0	0	0	0	0	1	0	0	1	4	6	1	1	0	0	2	8	0	0	8
中村	2	0	0	1	0	0	0	0	2	0	5	0	1	0	1	2	7	0	0	7
鈴木	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	2	0	2	4	6	0	0	6
白川	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3	1	0	0	2	3	6	0	0	6
外崎	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0	4	0	0	1	0	1	5	0	1	6
舛甚	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	4	0	1	0	0	1	5	0	0	5
木立	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	3	0	0	0	2	2	5	0	0	5
秋村	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	4	0	1	0	0	1	5	0	0	5
岩村	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	3	0	2	0	0	2	5	0	0	5
蛸島	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	4	0	1	0	0	1	5	0	0	5
成田	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	3	0	1	0	0	1	4	0	15	19
杉山	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	6
棟方	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	2	3	6	0	9
野呂	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	2	1	0	3

『むら』の成立過程から、藩政時代より明治初期にかけて一つの部落構成による村が成立していた小栗崎は、『伊藤』と『松川』姓でかためられ、秋元・鎌田・山中と続き、中柏木は『原田』姓が過半数をしめ、成田・杉山姓で構成され、小栗崎・中柏木は昔からこの姓でもって続いてきたと言っよい。

よって、現在の嘉瀬の氏姓を戸ごとに調べてみると、山中・鳴海・沢田・木下・斉藤・今・須崎・吉崎・鎌田・土岐・秋元・小松・小山内・木村と続き、原田・松川・伊藤・成田は一つの集団に構成されていることを知ることができる。

藩政時代の嘉瀬は、小栗崎・中柏木を除いて、古町・鍛冶町・車町・本町・畑中・冷水から構成されていたことは、掲載資料の『鎮守嘉瀬八幡宮御神楽諸色品帳』に綴られる奉加帳からも割り出すことができ、嘉瀬地区を村辺から遠く旧十川岸辺まで新田が開拓されるにしたがって分家または独立によって、戸数が増加され、古町を基点として山手通りの東方位（現津軽鉄道嘉瀬駅辺まで）の畑地が住宅地化していったことは派立・昭和町の氏姓をみると、先に述べた嘉瀬の氏姓のほとんどの氏姓を網羅していることで証明づけられる。

また、第二次世界大戦（大東亜戦争）も昭和二十年終末をつけ、戦後復興のきざしが見え、嘉瀬の村落構成も大きく変わってくる。

まず、戦後の外地からの引揚げ、関東・関西の疎開から初まって、現在の東町が主としてその受入れ居住地となり、人口の増加に伴って分家および独立。旧町よりの移転に伴って、嘉瀬地区の南に位置する清久溜池沿いに戦後新しい町名が構成された。（嘉瀬地区町内図参照／線区域）

したがって、この町内昭和町・新町・新堤町・東町の氏姓を集計してみたら、山中・鳴海・沢田・木下・斉藤・今・須崎・吉崎・鎌田・土岐・秋元・小松・阿部・松川・伊藤・鈴木・櫛引・工藤・小山内等の旧嘉瀬地区町内から分派独立して、そのほとんどの氏姓を網羅されていることを知ることができることは、嘉瀬はこれらの町内の地区に発展したことになる。

これらの嘉瀬地区の発展経過を、嘉瀬地区内の戸ごとの氏姓を調べてみて、二十年後の嘉瀬がどの方面地域に発展してゆくのか？、金木町嘉瀬地区の図面をひろげてみて、嘉瀬がどう変わってゆくのか興味をもたれるとともに、五十年後にも本稿の資料と対比してゆるることを次の世代の私達の孫たちに受け継ぎたい。

次に、代々嘉瀬の奉封家であった鳴海勲家で代々保存してきた「鎮守嘉瀬八幡宮御神楽諸色品帳」宿帳より、私達の祖先の氏名をひろってみた。まず藩政時代の嘉瀬の百姓には氏姓が付けられてなく一般に各自の家号または呼び名で表示していたので、明治年代から調査、氏姓を掲載する。

まず、鳴海家には寛政・天保時代の諸色品帳の奉賀帳が保存されているが、藩政時代の古文書は私には判読し難く、とり合えず、明治年代からの左の帳より調査してみた。

鳴海家所蔵御神楽宿主帳

◎明治二十九年旧四月三日

鎮守八幡宮御神楽諸色品帳

宿主 中村斧太郎



▲神楽例祭奉加帳



現当主鳴海勲氏▲



◀嘉瀬八幡宮大鳥居

昔のおもかげ庄屋の姿を
今に残す鳴海家



町名 氏姓	古 町	後 町	新 誠 町	鍛 冶 町	東 町	本 町	畑 中	冷 水	派 立	昭 和 町	小 計	昭 和 町	新 町	新 堤 町	東 町	小 計	計	小 栗 崎	中 柏 木	合 計	
田 中	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	2	3	
飯 塚	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3	0	0	3	
角 田	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	2	1	0	3	
古 川	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	1	2	1	0	3	
三 上	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	1	0	0	1	3	0	0	3	
その他の氏姓	安田 白崎 ② 佐野 毛内	加福 其田	大西	野谷 平井 神	出町	佐野 長利 野呂 高杉 小倉		米塚 間山	平井 野呂 中田 豊島 坂本 葛西 小田	小栗山		金沢 佐藤	泉谷 油谷 相馬 山本 対馬 西村 石川 大屋 桜庭 黒滝	小野 尾野 渡辺	対馬 長利 藤本 中谷 八幡 佐藤 高橋 高田			小野 菊地 栗野 太田	西村 小野 高橋 大川		
計	78	34	30	48	24	30	37	37	82	43	443	25	87	34	58	204	647	100	63	810	

(金木町住宅配置図より集計)

- ◎大正二十九年旧九月二十九日
秋神楽諸雑費記載帳
宿主 中村斧太郎
- ◎明治三十二年旧四月三日
鎮守八幡宮御神楽諸色品帳
宿主 鳴海万次郎
- ◎明治三十五年旧四月三日
鎮守八幡宮御神楽諸色品帳
宿主 沢田 才助
- ◎明治三十五年旧十月二十四日
秋神楽諸色記載帳
宿主 沢田 才助
- ◎明治三十八年四月三日
鎮守八幡宮御神楽諸色品帳
宿主 鳴海繁太郎
- ◎明治三十八年十一月八日
鎮守八幡宮御神楽諸色品帳
宿主 鳴海繁太郎
- ◎明治四十一年四月三日
鎮守八幡宮御神楽諸色品帳
宿主 鳴海繁太郎
- ◎明治四十一年十月二十八日
秋神楽諸色記載帳
宿主 土岐丑太郎
- ◎明治四十四年旧四月六日
鎮守八幡宮御神楽諸色品帳
宿主 中村斧太郎
- ◎明治四十四年旧十月七日
秋神楽諸色記載帳
宿主 中村斧太郎
- ◎大正三年五月七日(旧四月十三日)
鎮守八幡宮御神楽当前帳
宿主 鳴海丑之丞
- ◎大正三年旧八月一日
鎮守八幡宮御神楽諸色帳
宿主 鳴海丑之丞
- ◎大正六年旧三月十五日
八幡宮御神楽当前諸払帳
宿主 鳴海大五郎
- ◎大正六年旧十月十五日
秋神楽諸色記載帳
宿主 鳴海大五郎
- ◎大正九年旧三月十五日
八幡宮御神楽当前諸払帳
宿主 木村象五郎
- ◎大正九年十月十五日
秋神楽諸色記載帳
宿主 木村米太郎
- ◎大正十二年旧三月二十日
鎮守八幡宮御神楽諸色品帳
宿主 舛甚子之太郎
- ◎大正十五年五月五日
鎮守八幡宮御神楽諸費払帳
宿主 鳴海万次郎
- ◎大正十五年旧十月二十日
秋神楽諸色記載帳
宿主 鳴海万次郎
- ◎昭和四年五月五日
鎮守八幡宮御神楽諸費受払帳
宿主 沢田勇之助
- ◎昭和七年五月五日(旧三月三十一日)
鎮守八幡宮御神楽諸費受払帳
宿主 鳴海万次郎

八幡宮御神楽例祭宿主奉加帳より推移する
嘉瀬氏姓の変せん

嘉瀬部内の小栗崎には稲荷神社、中柏木には磯崎宮、嘉瀬には八幡宮とそれぞれ氏神が奉じられていることは、これらは藩政時代から一つの

嘉瀬八幡宮例祭宿主帳集計氏姓別年別戸数調

年別 氏姓	明治 32年	明治 35年	明治 38年	明治 41年	明治 44年	大正 3年	大正 6年	大正 12年	大正 15年	昭和 4年	昭和 7年	適 用
山中	41	47	52	52	53	57	53	59	61	56	56	
鳴海	26	31	28	31	28	34	32	30	37	37	37	
沢田	17	20	22	19	18	21	19	26	27	25	26	
今	17	19	22	19	22	20	21	14	22	19	20	
木下	10	10	10	10	12	12	13	13	14	13	17	
工藤	13	12	15	12	12	13	11	12	14	13	14	
須崎	11	11	12	10	12	11	10	10	11	11	13	
吉崎	9	8	8	9	10	10	9	11	9	14	13	
斉藤	8	8	7	7	10	12	11	8	10	12	12	
土岐	6	8	11	7	9	12	10	11	10	11	12	
秋元	2	6	7	7	6	7	6	6	8	8	12	
原田	7	7	8	10	10	8	7	6	9	9	9	
神島	7	7	7	5	8	8	9	11	8	10	9	
鎌田	6	7	8	6	9	9	9	9	8	11	8	
花田	2	3	3	3	2	3	4	4	7	7	8	
楠引	4	4	5	5	5	5	6	6	7	8	8	
木村	5	7	9	9	8	11	11	9	9	8	9	
小山内	7	7	8	8	6	5	6	6	5	5	7	
中村	7	10	10	9	9	9	9	7	5	3	7	
小松	2	4	3	3	3	5	3	3	6	5	6	
浜田	5	5	6	5	4	5	5	5	7	6	8	
飯塚	3	4	4	5	4	5	4	4	7	5	6	
黒川	5	10	10	10	9	11	9	10	9	8	8	
舛甚	1	3	3	3	5	5	4	2	5	4	5	
蛸島	7	7	4	5	3	5	5	6	5	5	5	
内海	3	6	6	6	7	9	6	5	6	6	4	
平川	3	5	4	4	4	4	5	4	4	3	4	
津田	2	2	2	3	4	3	4	5	4	5	4	
木立	1	3	3	4	5	4	4	3	4	5	4	
阿部	2	2	3	2	3	4	4	4	3	2	3	
岩村	1	2	3	3	2	3	3	2	3	3	3	
鈴木	2	2	1	3	3	2	2	1	1	2	2	
外崎	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	
秋村	2	2	2	1	3	4	2	2	2	2	2	
三上	3	3	3	2	4	3	3	3	1	1	1	
棟方	1	1	3	2	1	1	1	1	1	1	1	
佐野	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
広瀬	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
野呂	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
間山	2	1	2	1	1	1	1	2	1	1	1	

年別 氏姓	明治 32年	明治 35年	明治 38年	明治 41年	明治 44年	大正 3年	大正 6年	大正 12年	大正 15年	昭和 4年	昭和 7年	適 用
中野	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
長利	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	
高杉	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	
白川		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
野戸谷			1	1	1	1	1	1	1	1	1	
江良					1	1	1	1	1	1	1	
小倉						1	1	1	1	1	1	
伊丸岡							1	1	1	1	1	
金沢								1	1	1	1	
嶋谷								1	1	1	1	
野宮									1	1	1	
平井									1	1	1	
安田									1	1	1	
対馬									1	1	1	
坂本										1	1	
野上											1	
計	258	303	324	310	326	353	334	335	370	367	387	

村落として構成されていたものであり、それぞれの村落は部落神として氏子でもあったのである。

鳴海勲氏所蔵による鎮守八幡宮御神楽諸色品帳による奉加帳は、現在金木町に合併されている嘉瀬にとつては、旧嘉瀬村役場の諸資料も散逸して無い今、当時の嘉瀬の人名・記録をさぐるうえには貴重な文書（古文書）となっている。

『明治も遠くなりけり』で、明治より百年以上も経過した昭和も五十九年にもなつてなんで『木下なにセンキやんで、こたことさぐるだば』と、嘉瀬の皆さんにおしかりをこうむるかも知れんが、忘れ去られた遠い過去も、また、私達にはふり返ってみる必要があるのではないか。そこには私達の先祖のにおい、足跡が残されているからである。

明治三十二年から昭和七年までの八幡宮奉加帳より抽出した氏姓別の戸数は『嘉瀬八幡宮例祭宿主帳集計氏姓別年別戸数調』のとおりとなり昭和五十九年四月現在『嘉瀬地区町内別区分表』と対照してみただければ、山中姓で明治三十二年より昭和七年まで十五戸の増、昭和五十九年まで旧地区の二十二戸の増となり、戦後発展した昭和町・新堤町・新町を加えると四十四の増の二倍となっていることが知れるので、嘉瀬地区の皆さん御検討対比していただきたい。

また、明治三十二年から昭和七年までの、旧嘉瀬地区の戸数の動向をさぐってみると、明治三十二年から明治四十四年までは、やや平均した戸数増加となっているが、大正三年から大正十五年までは戸数の変動が甚だしく、大正三年三五三戸あった戸数が、大正六年には三三四戸と少なくなつていて、大正十五年には平常の戸数にもどつてゐることは、この年代に社会情勢の変動、経済機構の変革、通貨の変動の社会不安が伴